

2011年度教員研修留学生 (Violeta Tenorio) 報告書コメント

指導教員 篠原 文陽児 (総合教育科学系教育学講座)

Violeta!

あなたご自身にとってはもちろん、母国ペルーとわが日本国の教育界及び学びを共にした東京学芸大学にとっても、有意義な研究成果報告書の完成とご発表、まことにおめでたいことです。

同時に、平成 22 年 10 月以来 1 ケ年半におよぶ異国の地での教員研修の修了。心からお祝い申し上げます。

さて、Violeta Tenorio 氏の研究報告書の表題は、Comparison between school system in Japan and Peru - What makes school system successful? - である。

氏の母国ペルー国における中等学校教育システムが直面している課題とその解決策を、日本語の資料は豊富にあるものの難解であることに加え、英文の資料が乏しい中で、UNESCO 及び OECD 及び UNESCO など国際機関が発行している資料等を丹念に調べ、ペルー国の歴史、文化を重要視しながら、詳細にかつていねいにまとめあげ論じ、高く評価できる。

氏は、本学において教員研修を開始する以前、母国ペルーでは、「Eastern Festini de Ramos Ocampo 高等学校」で、コミュニケーションを教えていた。しかし、目の前の生徒に対するコミュニケーション指導の改善意欲は衰えることなく、国の着実な発展を第一義に考えると、「人材資本(Human capital)」の考え方を重視した学校教育システム全体の課題を解決する必要性を確信し来日され、筆者の研究室で「教育のシステム化」つまり「教育工学的発想と行動規範」の中で、他の多くの留学生及び日本人学生等とともに、直ちに勉学を開始し、本研究報告書を上梓した。

本研究報告書で対象とされているような国際的な視野に立つ教育システムを比較検討する際に、もっとも悩ましい問題の一つは、国によって学校等の名称が同じでも、通学する児童生徒等の年齢段階が異なっていることが多々あることである。そのため、世界的に今日的な教育課題の一つである「発達段階を重視した教育」を推進する観点からは、単に初等教育や中等教育という学校教育等の呼称のもとで、議論することはできない。

グローバル化が進展する中、国際化のみならず地域や地方の特色を強化する観点を視野に入れた教育システムの改善について、本研究報告書に関係する教育段階の呼称が標準化されつつある。

ユネスコ統計研究所(UIS, UNESCO Institute for Statistics)は、2011年11月第36回UNESCO総会において「教育の国際標準分類(ISCED, International Standard Classification of Education)」を採択している。これは、同じく国際機関であるOECD及びEurostatと協力して、学校教育段階の呼称を国際的に標準化している。たとえば、2011年版では、第二回改訂の1997年版と比べ、PrimaryとLower secondaryの二者をあわせたBasic educationという呼称は、しないことになっている。2011年版にはBasic educationという呼称はないということである。

日本滞在中での勉学を含む本研修成果に加え、国内及び国際会議への参加を含む多様な経験と体験をもとに、研究の深化と進展が大いに期待されるとともに、研修期間中に会った多くの友人・知人との人間関係を深め、新たな時代に向かう学校教育を中核とした文化の創造、そして、何よりも、日本とペルー両国の教育、文化等の交流についても、いっそう有為な理解者及び推進者の一人として、幅広く活躍してくれることを願っている。
(2012年3月13日記FS)